

東日本大震災1年



「りくカフェ」で、東京大の小泉さん（左から2人目）と話し合うスタッフ（陸前高田市で）

東日本大震災の被災地で、住民向けの「『コミュニティーカフェ』」が相次いで開設され、地域の貴重な「憩いの場」になっている。震災から1年を迎えて、住民同士のつながりを再構築しようという動きが本格化してきた。（田中左千夫）

岩手県陸前高田市の住宅地に今年1月、カフェがオープンした。木のぬくもりを生かした内装で、外光をふんだんに取り入れ、明るい雰囲気だ。

「りくカフェ」と名付けられた店は、平日は午前10時から午後4時まで営業。開設の中心となった主婦の吉田和子さん（58）ら、地元女性12人が交代で接客する。メニューはコーヒー（200円）や紅茶（100円）など飲み物だけだが、スタッフが持ち寄った菓子も無料で提供している。

通常は日曜日が休みだが、節目となる11日は臨時に開店。多くの人が訪れた。

た吉田さんは昨年8月、カフェ開設に動き出した。吉田さんと親交のある東京大准教授（都市工学）の小泉秀樹さんらの協力を得て、住宅メーカーなどが店舗を無償提供する。別々の仮設住宅に移った町内会のメンバーなど、離ればなれになつた人たちが再び集う場としてもカフェは

憩いのカフェで住民集う

い雰囲気だ。

「節目を迎えて、新たなるがりを生む場にしたい」という思いがさらに高まった」と吉田さん。平日は、仮設住宅の主婦らが1日に20～30人訪れて歓談する。

こどもの詩

春との出会い 小島 あやめ

寒い冬の日
歩こうとして
ふみだした一步
地面につくまことに止めた
ふとのぞくと

かわいい一輪の花
ほら 春からの贈り物

（埼玉県所沢市・若松小6年）

離ればなれの人々 再びつなぐ

活用されている。

宮城県女川町でも昨年12月、町立病院の敷地内に、町内の経営者らが「おちゃっこクラブ」を開いた。震災で店を失つた喫茶店主の岡裕彦さん（53）がマスターとなり、喫茶店の名物だったナポリタン（400円）などを提供。美術家の支援で、内装に手を加えるワークシ

独自の被災者支援に取り組んでいるのが、福島県南相馬市のカフェ「べんりD a D o（だじー）」。スーパーの一角に設けた仮設店舗で、餅つき大会を催したり、「エステサロン」を開いたりし、住民が集まりやすい工夫をしている。

*「住」休みました。

「『コミュニティーカフェ』地域の交流を促すため、空き店舗などに開かれたカフェ。ボランティアによる運営が多く、住民が飲食をしながら、子育てや高齢者の生きがいづくりなどの課題に取り組む。ここ10年で各地に広まり、長寿社会文化協会が把握している常設のカフェだけで、全国に150か所以上ある。

組んでいるのが、福島県南相馬市のカフェ「べんりD a D o（だじー）」。スーパーの一角に設けた仮設店舗で、餅つき大会を催したり、「エステサロン」を開いたりし、住民が集まりやすい工夫をしている。

こうした「『コミュニティーカフェ』」は、全国各地で広がり、多くの被災地で活動している。この10年で各地に広まり、長寿社会文化協会が把握している常設のカフェだけで、全国に150か所以上ある。

被災地の記録映像
都内で完成上映会

途上国の貧困解消を目的としたフェアトレード商品を扱う「ピープル・ツリー」代表のサフィア・ミニーさんら

が、東日本大震災の被災地で記録映像を制作した。13日午後7時から、ピープル・ツリー自由が丘店（東京）で上

季節って、最初は目立たない小さな物から変化してゆくんだ。そして、ある日突然すべてが変わったんだ。

映会を行う。
・アフター3
2月中旬に撮